



大同生命厚生事業団への報告書より
知的障がい者のお芝居“出前”公演
知的障がい者が地域社会で生きるための一歩として
鎌田貴嗣

①活動の目的

「知的障がい者と地域の人たちとの距離を、少しでも縮めたい。」

知的障がい者の施設で働くある職員の一言から、この活動は始まりました。

私たちが普段生活をしていて、知的障がい者と接する機会はどのくらいあるでしょうか。
残念ながら、おそらく大抵の人は「ほとんどない」と答えると思います。

私たちが蓮根福祉園の演劇クラブのメンバーと初めて出会ったのは、一昨年（2017年）の春でした。

蓮根福祉園（社会福祉法人東京援護会・蓮根福祉園）は、板橋区にある知的障がい者の通所施設で、私たちは、そこの利用者の方遂に芝居を届けに行き、それがきっかけで、施設内の演劇クラブの稽古に参加し、芝居作りを手伝うようになりました。

少し話はずれますが、私たち「お芝居デリバリーましまり」はこれまで、一般の方達はもとより、幼稚園・保育園、小学校、高齢者施設、精神障がい者施設、地域交流会、海外での異文化交流など、様々な人達に芝居を届ける活動を行ってきましたが、その中でも知的障がい者の方途の前で芝居をすると、驚かされることがたくさんあります。

最も印象的なのは、どんなに重度の障がいを持った人でも、こちらが心底本気で演技をすると、グッと息を詰めるように集中して見るということです。面白い時には素直に全身で笑います。

怖いと感じた時は、こちらまでピリピリと伝わるくらい緊張して見えています。それらを通じて驚きをもって感じるのは、彼らの想像力の逞しさ、感情の純粹さ、その想像力・感情が身体と直結しているということです。

そんな彼らと一緒に芝居を作るのは、勿論、大変ではありますが、刺激が多く楽しいものでもありました。稽古中にも何度も、こちらの想像を遙かに超えるものを見せてくれました。そうして作り上げた演劇クラブの芝居は、一昨年（2017年）の秋と去年（2018年）の秋、年一回行われる園の「れんこん祭り」で披露してきました。このお祭りは誰でも入園自由で、園が地域に開かれる唯一の場でもあります。しかし実際には、訪れるのは利用者の家族と関係者がほとんどで、その唯一の場も、知的障がい者と地域の人たちが出会い、繋がっていく機会とは

なり得ていません。去年のれんこん祭りが終わり、演劇クラブの担当職員が話したのが冒頭の言葉でした。

「経済的な自立も勿論大切だけど、知的障がい者が本当の意味で自立して生きていくためには、一人一人が、生きているその地域の人たちと繋がって、見守ってもらい、時には助けてもらうことが何より必要だと思う。」

と、その職員は続けました。

現実には、通所する利用者の日々の生活は、それぞれの家庭と園との往復で、そのほとんどが完結しています。知的障がい者と地域の人たち両者が接する機会はほとんどなく、その生活は断絶されています。知的障がい者への無理解・無関心の最も大きな原因は、この断絶された環境にあると言えます。同じ地域のすぐ身近に、こういう障がいを持った人たちが暮らし、生きているということを、まずは知ってもらいたい。

「だったら、演劇クラブの芝居を外に持って行ってみましょうよ。」

待っていてもどうしようもないなら、こっちから出会い、繋がりを作りに行こう。外に向かって一歩、踏み出そう。彼らの魅力が溢れた「お芝居」を持って行くことは、まさに、その一歩にうってつけじゃないか-----。

②活動概要

こうして、私たちまりまりと蓮根福祉園の演劇クラブは二人三脚で歩み始めましたが、実現までには、幾つかの問題に直面しました。その中でも大きかった一つは、前述したクラブの担当職員が他施設へ異動になってしまったこと。彼の思いを原動力として始まり、その熱意が活動の一つの柱となっていたため、彼の欠落は致命的な痛手に思われました。

実現には何よりも一人一人の熱意が不可欠です。新しい担当職員と、私たちまりまりとの活動へ向ける温度差は、当初、やはり大きなものでした。しかし、お互いに率直な思いを話し合い、そしてそれ以上に、クラブのメンバーと一緒に稽古を重ね、メンバーの普段とは違う魅力的な姿に触れるうちに、知的障がい者を支える職員として、私たちとはまた違った「独自の」熱意を持つようになりました。これは非常に大切なことだと思います。

もう一つは稽古の問題です。私たちは、それまでの月一回のクラブ時間に加えて、土・日曜の休日にも稽古を行う予定でいましたが、様々な制約から現実的にそれは難しいということを知り、頭を抱えました。その時、福祉園から思いもよらない案が出されました。「仕事」として演劇の稽古をしたらどうか、助成金の一部をその「作業費」として当てたらどうか。この画期的な発案によって「演劇作業」という新しい仕事が誕生し、メンバーは演劇を仕事として行うことが可能になりました。そして、このことはメンバーに、一つ

の大きな変化をもたらしました。「この演劇の稽古はクラブではなく、仕事なんだ」という意識が浸透するにつれて、メンバーそれぞれが、少しずつ責任感と誇りを持って稽古に臨むようになっていったのです。

6月の半ば、いよいよ本格的な稽古に入りました。芝居は、ウクライナの民話「てぶくろ」を独自に脚色したもので、10人のメンバーは様々な動物に扮して登場します。芝居を作る際に最も気を配り、力を注いだのは、「一人一人の魅力を最大限に引き出す」ことでした。メンバーは、障がいの度合いも、勿論その性格もそれぞれが異なります。段取りを踏むのが苦手、飽きっぽく同じことを繰り返せない、発する言葉が聞き取りづらい、ほとんど発語が出来ない・・・、メンバーそれぞれの欠点を挙げていけば切りがありませんが、それらを逆手に取れば強力な武器になります。欠点を生かすことで、独特の「間」が不思議な魅力になったり、同じ一言を何度も繰り返すことで笑いを誘ったり、立ち姿と動きだけで演じたりと、それぞれの演技スタイルが出来上がっていきました。また、得意なことは積極的に取り入れ、ウサギがフラダンスを踊ったり、ブタがソーラン節の群舞をしたり、生き生きと特技を披露するその姿は、芝居を大いに盛り上げました。私たちがそこに込めたのは、楽しんで演じて欲しいという思いと、メンバー一人一人が持つ人間的魅力を出来る限り、観る人へ伝えたいという強い思いでした。

当初10月上旬に予定していた公演日は諸事情で延期となり、初の外部公演は、10月29日、地域のデイサービスセンターで行うことに決定しました。メンバーの多くは、普段の活動圏外に出ることに不安、緊張を抱くため、その解消のために、本番を、一週間後に控えた22日、全員で会場の下見に伺いました。高齢者の方途はとても暖かく迎えてくれて、メンバーの一人が代表して「来週、劇を見せに来ます」と挨拶すると、「持ってるよー」と声をかけてくれました。芝居を届ける相手を目の前にして、やはり少し緊張した面持ちではありましたが、全員がそれぞれの形で、気持ちを新たにしましたようでした。

そして10月29日。約30人の高齢者の方が見つめる中、メンバーはかつてない程の熱演を見せました。演技の出来栄はもとより、メンバー全員の思いが実を結んだ、奇跡のような舞台でした。会場は終始笑いに包まれ、ラストシーンでは涙を流すお客さんもいました。知的障がい者と地域の人たちとの距離を、少しでも縮めたい」という一人の職員の言葉からこの活動は始まりましたが、本番を見ながら、それは知的障がい者一人一人の願いでもあるんだということを強く感じました。芝居の具体的な描写はここでは省きますが、本番後に、メンバーと一緒にお茶を飲みながら話してくれた高齢者の方達の感想と、園に戻ってからの、メンバー本人達の言葉の幾つかを、以下に挙げます。

高齢者の方達の感想：

「ユーモアの中にも心暖まるものがあって、涙が出た」

「こうやって一生懸命に練習して、しっかりやっているのを他の皆さんにも知って頂きたい」

「最後に仲良く帰るシーンが微笑ましく、良かった」

「何をやっても楽しいのが一番。人を楽しませて自分も楽しむ、それが一番。これからもどんどん成長して
いってね」

また、普段一人では立ち上がらない方が、テーブルに手をつけて立ち上り歩いて来て、メンバーの手を取って
「ごくろうさま。練習したんでしょう。ありがとうございます」と声をかけるということもありました。

メンバーの言葉：

「おばあちゃんおじいちゃんが見てくれて嬉しかった」「演劇クラブ、楽しかったです」

「みんなで協力し合って、本当最高だなって思いました。僕達の演技をアツタカく見てくれるから泣きそうにな
っちゃったんですけど、でも、それをこらえて演劇することが出来ました。本当今日は嬉しかったです」

「うちで夜ベッドから出て、朝まで練習してた。お年寄りのセンターは、すごいいっぱいいけど良かった。
(これからも演劇を)やる」

メンバーの中にはほとんど発語出来ない人、字面に起こしても伝わりづらい言葉も勿論ありましたが、それ
ぞれが、誇らしげな満足した笑顔を顔いっぱいにとたえていました。また、本番前に、極度の緊張から八二
ック寸前になっていたあるメンバーも、本番では、最高の演技を見せてくれました。

演劇クラブの外部公演は、今、一步を踏み出したばかりです。

メンバーを支えながら稽古を重ね、ナレーション役として共に舞台にも立った、担当職員の言葉を最後に挙げ
ます。

「彼らの表現する力は凄い。今日はその底力を感じました。彼ら自身にとっても目標を持って生きることは
非常に大切なことだと思います。これからも活動を続け、外へ向かって、もっと多くの人たちに広げてい
きたいと思います。」